

『坊っちゃん』論

——「坊っちゃん」の異国体験とは何か——

大 貫 徹

はじめに —「野蛮な所」から「不浄な地」へ—

ぶうといって汽船がとまると、舳が岸を離れて、漕ぎ寄せて来た。船頭は真っ裸に赤ふんどしをしめている。野蛮な所だ。尤もこの熱さでは着物はきられまい。(略) 見る所では大森位な漁村だ。人を馬鹿にしていなあ、こんな所に我慢が出来るものかと思ったが仕方がない。⁽¹⁾

これは言うまでもなく、「四国辺のある中学校」(16頁)に数学の教師として赴任することになった「坊っちゃん」が、東京から汽車と汽船を乗り継いでほるぼるやってくるという有名な場面(小説第2章冒頭部分)である。「汽船がとまる」や否や「野蛮な所だ」と断定する「坊っちゃん」は、陸に上がるとすぐに、「気の利かぬ田舎ものだ」(18頁)あるいは「田舎者のくせに人を見括ったな。(略) 田舎者はしみったれだから五円もやれば驚ろいて眼を廻すに極っている」(20頁)という具合に、「田舎者」という言葉をしきり口にする。最初から田舎者呼ばわりをして、いわば喧嘩腰で新しい土地にやって来るとでもいうところであろうか。実際「坊っちゃん」は赴任先の中学校の生徒に対しても最初から高飛車な態度に出ている、そこには、私たちが想像するような意味での教師と学生との心の繋がりなどというものは微塵もない。

二時間目に白墨を持って控所を出た時には何だか敵地へ乗り込むような気がした。教場へ出ると今度の組は前より大きな奴ばかりである。(略) こんな田舎者に弱身を見せると癖になると思ったから、なるべく大きな声をして、少々巻き舌で講釈してやった。(27頁)

ところでこの「坊っちゃん」は、物語の最後に、同僚の教師である山嵐と

一緒になって、教頭である赤シャツとその手下の野だいこに「貴様らは奸物だから、こうやって天誅を加えるんだ。これに懲りて以来つつしむがいい」(141頁)と言いつつ激しく暴力を振るうのだが、その直後、あわただしくこの土地を去って行くことになる。これが小説のほぼ最後に位置する場面(小説第11章末尾近い部分)である。それを次に見てみよう。

汽船は夜六時の出帆である。山嵐もおれも疲れて、ぐうぐう寝込んで眼が覚めたら、午後二時であった。下女に巡査は来ないかと聞いたら参りませんと答えた。「赤シャツも野だも訴えなかったなあ」と二人で大きに笑った。その夜おれと山嵐はこの不浄な地を離れた。船が岸を去れば去るほどいい心持ちがした。神戸から東京までは直行で新橋へ着いた時は、漸く娑婆へ出たような気がした。(142頁)

この引用中にある「おれ」とは言うまでもなく、これまで私が「坊っちゃん」と呼んでいた人物である。さて、この最後の場面において「坊っちゃん」は奇妙なことを口走る。それは、赴任先の土地を「不浄な地」と呼び、「船が岸を去れば去るほどいい心持ちがした」と言っていることである。どうしてこの土地が「不浄な地」なのか。先に引用した第2章冒頭にあったように、「野蛮な所」というのであれば分からないわけでもない。つまり「東京＝文明」に対して「地方＝野蛮」という、よく見かける二分法だからである。⁽²⁾しかし「不浄な地」とはいったいどういうことなのであろうか。

そもそも「浄・不浄」という二分法は、人類学においてしばしば論じられる概念であるが、『文化人類学事典』の解説によれば、衛生学的観念と呪術＝宗教的および象徴論的概念とが密接に関連しあった概念として一般的に考えられているとのことである。⁽³⁾たとえばインドのカースト制度において、上位のカーストが下位カーストを穢れた不浄な存在として結婚や共に食事をすることを忌避したり、あるいはユダヤ人やジプシーが穢れているとあって彼らを差別し忌み嫌ったりするということである。日本では言うまでもなく、島崎藤村の『破戒』にも描かれた、えた・非人に対する差別・偏見がこの典型的な例であろう。

ということは「四国辺のある」城下町とはあたかもえた・非人の多く住む「穢れた、不浄なる土地」であったと言いたいのであろうか。もちろんそう

ではないだろう。あるいは、その地には「まるで男だか女だか分りゃしない」(46頁)赤シャツたちがいて、ひそかに陰謀を巡らし、「善良な君子」(87頁)そのものである「うらなり」がその策略にかかって九州の延岡まで飛ばされてしまったからであろうか。しかしそんなことはどこにでもあることであって、何もこの土地に限る話ではない。それまで住んでいた東京にだって同じようなことはあったはずである。したがってそうしたことがために「坊っちゃん」が「不浄な地」という言葉を使っているとも思われない。

しかしこの言葉は聞き捨てならない。第2章冒頭にあったように、その地が「野蛮な所だ」というのであれば、「文明」がその地を啓蒙することで、その地は——容易にできるわけではないにせよ——野蛮状態から脱することができる。したがって「文明」と「野蛮」の違いは簡単に言えば同じ座標軸での位置の違いと言えるであろう。⁽⁴⁾しかし「不浄な地」ということになるとそういうわけにはいかないのではないか。というもある場所が「不浄な地」であるということは、その地が穢れていて、多くの人から忌み嫌われているということである。実際、私たちの歴史において、えたや非人は、単なる野蛮人というのではなく、いわば人間以下の、言ってみれば犬畜生にも似た賤民として多くの人々から差別され忌避されてきたはずである。そうである以上、それは——しばしば「不浄」と「野蛮」が重なるにせよ——単なる座標軸上の位置の違いとは言えないであろう。あきらかに座標そのものがまったく異なっていると考えざるを得ないのだ。⁽⁵⁾

ということは逆に考えると、第2章の冒頭では単に「野蛮な所」に過ぎなかったこの土地が、その約1ヵ月後そこを離れる際には「不浄な地」と呼ばれるようになっていったのは、何か大きな変化——それも質的な次元での大きな変化——が「坊っちゃん」の中に生じたということになるのではないだろうか。⁽⁶⁾ではその大きな変化とはいったい何か。それをここで明らかにしたいと思う。しかしそのためには、「坊っちゃん」が「四国辺のある」城下町でいったいどのような体験をしたのか、それをまず詳しく検討してみなければならない。

第1章 —「異国体験」をする「坊っちゃん」—

「坊っちゃん」は、「大変な遠くへ行かねばならぬ」(16頁)という決意のもと「四国辺のある」城下町にやってくるが、その際に以下のような記述が見られる。

生まれてから東京以外に踏み出したのは、同級生と一所に鎌倉へ遠足した時ばかりである。今度は鎌倉どころではない。(16頁)

「四国辺のある」城下町とは、したがって、大変遠くにあるもの、いわば世界の果てのさらに向こうにあるものと意識されていたようである。実際、下女の「清」は、「坊っちゃん」が田舎に行くという話を耳にすると、すぐさま次のように尋ねるのである。

「そんなら、どっちの見当です」と(「清」は一大貫注)聞き返した。「西の方だよ」と(「坊っちゃん」が一大貫注)いうと「箱根のさきですか手前ですか」と問う。(17頁)

ここに引用した二つの箇所は、当時の東京(江戸)の人々にとって世界の境界線がだいたいどの辺にあるのかを示していきわめて興味深いものであるが、「坊っちゃん」が赴く場所がそうした境界をはるかに超えた地点にあると意識されている以上、彼や「清」にとっては、「四国辺のある」城下町とはまさに「異国」としか言いようがないのである。したがって「坊っちゃん」の中学教師体験とはまさに「異国体験」そのもの⁽⁷⁾とすべきであろう。もちろんここにはいわゆるパリやロンドンといった外国は登場しないし、「坊っちゃん」が言語や食習慣等で大いに苦労したとも記されていないが、しかしそれでもやはり異国体験の物語であることに間違いはないであろう。だからこそ「どんな町で、どんな人が住んでるか分らん」(16頁)となるのであるし、あるいはまた「箱根の向だから化物が寄り合ってるんだというかも知れない」(87頁)ということになるのである。

したがってこの物語では、こうした「異国体験」を経ることによって、

「四国辺のある」城下町が単なる「野蛮な所」から「不浄な地」へと劇的に変貌して行ったということになる。

ところでここで視点を少し変えてみよう。「坊っちゃん」にとって「不浄な地」ではない場所、言い換えれば「浄らかなる場所」とはどこか、まずそういう視点から考えてみよう。するとすぐに思い浮かぶのは次のような一節である。これは先に引用した物語最終場面の一節に直接続くものである。

その夜おれと山嵐はこの不浄な地を離れた。船が岸を去れば去るほどいい心持ちがした。神戸から東京までは直行で新橋へ着いた時は、漸く娑婆へ出たような気がした。山嵐とはすぐ分れたぎり今日まで逢う機会がない。清のことを話すのを忘れていた。——おれが東京へ着いて下宿へも行かず、革靴を提げたまま、清や帰ったよと飛び込んだら、あら坊っちゃん、よくまあ、早く帰って来て下さったと涙をばたばたと落した。おれも余り嬉しかったから、もう田舎へは行かない、東京で清とうちを持つんだといった。(142頁)

この一節には、「坊っちゃん」が船で神戸に着くとそのまま東海道を汽車で上り、東京・新橋に着くや否や「下宿へも行かず、革靴を提げたまま、清や帰ったよ」と「清」のもとへまっしぐらに飛び込む様子が描かれている。「不浄な地」を離れた「坊っちゃん」があたかもその穢れを払い除けるかのように「清」のもとに駆けつけたというわけである。ここではまさに「清」(きよ)という名が「浄らかさ」そのものを象徴しているかのようなのである。これは単なる言葉遊びとは言えないであろう。作者である漱石はあきらかにそれを意識しているはずである。⁽⁸⁾ だがその「清」も「坊っちゃん」と一緒に住み始めたと思った途端、残念ながら肺炎に罹って死んでしまう。

清は玄関付きの家でなくとも至極満足の様子であったが気の毒な事に今年の二月肺炎に罹って死んでしまった。死ぬ前日おれを呼んで坊っちゃん後生だから清が死んだら、坊っちゃんの御寺へ埋めて下さい。御墓のなかで坊っちゃんの来るのを楽しみに待っておりますといった。だから清の墓は小日向の養源寺にある。(142頁)

「清」との生活はかくしてきわめて短いまま終わってしまうのであるが、その死の直前、「清」は「坊っちゃん」に、あたかも先に死んで行く恋人か

妻のように「御墓のなかで坊っちゃんの来るのを楽しみに待っております」と告げるのである。これは、平岡敏夫が言うように、⁽⁹⁾まさに「偕労同穴」の願いそのものであろう。しかし「清」とは単なる下女、しかも「婆さん」(10頁)に過ぎない。その年老いた下女にここまで言われてしまうとは、これは考えてみればきわめて奇妙な、いやきわめて不気味でグロテスクな関係と言わざるを得ないのではないだろうか。だからこそ「坊っちゃん」の下宿先の婆さんに、「清」のことを東京に残してきた愛妻であるかのように誤解されてしまうのである。しかもさらに驚くべきことに「坊っちゃん」はその誤解を積極的に解こうとはしないのである。

「しかし先生（「坊っちゃん」-大貫注）はもう、御嫁が御ありなさに極っとらい。私はちゃんと、もう、睨らんどるぞなもし」（略）「こいつあ驚いた。大変な活眼だ」「中りましたろうがな、もし」「そうですね。中ったかも知れませんかよ」（略）「何ですかい、僕の奥さんが東京で間男でもこしらえていますか」「いいえ、あなたの奥さんは髄かじゃけれど」（76頁）

第2章 —アイデンティティの危機—

それではいったい「清」とは何者か、それが次の問題となる。実際この物語のもうひとりの主人公とでも言うべき存在は赤シャツでも山嵐でもなく、実はこの「清」なのである。⁽¹⁰⁾ここで物語冒頭に戻って、第1章の記述をいくつか読んでみよう。

おやじは些ともおれを可愛がってくれなかった。母は兄ばかり鬮負にしていた。（略）おれを見る度にこいつはどうせ碌なものにはならないと、おやじがいった。乱暴で乱暴で行く先が案じられると母がいった。（略）おやじは何もせぬ男で、人の顔さえ見れば貴様は駄目だ駄目だと口癖のようにいつていた。（略）母も死ぬ三日前に愛想をつかした——おやじも年中持て余している——町内では乱暴者の悪太郎と爪弾きをする（略）。おれは到底人に好かれる性でないとあきらめていた（略）。（9—10頁）

「おれは到底人に好かれる性でないとあきらめていた」とあるように、「坊っちゃん」は、自分のことをあらゆる他人からとことん嫌われている存

在として、いわば否定的に自己を捕えている。ところがここに、「もと由緒のあるものだったそうだが、瓦解のときに零落して、つい奉公までするようになった」(10頁)「清」という名の年老いた下女が登場し、この「清」ひとりが逆に「坊っちゃん」を徹底的に肯定することになるのである。

この婆さんがどういう因縁か、おれを非常に可愛がってくれた。不思議なものである。(10頁)

自分の親をはじめ多くの人が「おれ」を否定するのに対して、「清」ひとりが逆に「おれ」をむやみに肯定するという「不思議な」(10頁)状況がここに生まれてくるのである。それゆえ「坊っちゃん」が、「清は時々台所で人のいない時に「あなたは真っ直でよい御気性だ」と賞める事が時々あった。しかしおれには清のいう意味が分からなかった。好い気性なら清以外のものも、もう少し善くしてくれるだろう」(10頁)と思うのも当然である。「おれ」は親にも見放された「悪太郎」なのか、それとも「清」の言うようにその反対なのか、もし后者だとしたら、どうして世間の人は自分のことを「悪太郎」としか見ないのか。こうした状態を私たちもE.H. エリクソンに倣って、アイデンティティ・クライシス⁽¹¹⁾と呼ぶことも可能ではないかと思うのだが、いずれにせよ、そのような精神的危機状況に「坊っちゃん」は陥っていたのである。そんなとき「坊っちゃん」は偶然のきっかけから「四国辺のある中学校」に数学の教師として赴任し、そこで「異国体験」とでも言うべき経験をするようになるわけである。そして結論を先取りして言えば、この物語とは、いわばアイデンティティの危機とでも言うべき状況の渦中にいた「坊っちゃん」が下女の「清」からいったん遠く離れることによって、「清」の言うとおり、自分は「悪太郎」などではなく「真っ直でよい御気性」(10頁)の、「正直な純粋な人」(56頁)であるということ強く自覚するようになる⁽¹²⁾という物語なのである。

その意味ではこの物語は「坊っちゃん」という若者の成長する様子を描いた、一種の「教養小説」と言えるかもしれない。しかしそう考えることはこの物語の本質を見誤ることになる。というのも私には「坊っちゃん」が精神的に成長したとは少しも思えないからである。むしろ「清」から遠く離れ「異国」の地で生活することによって、「坊っちゃん」は成長するどころか逆

に、精神的に急激に退行していったのではないかと考えるからである。事実そうした「精神的退行」の結果、「坊っちゃん」は東京に戻るや否や「下宿へも行かず、革靴を提げたまま、清や帰ったよ」と「清」のもとへ——あたかも幼児がしばらく逢わなかった母親の胸に飛び込むように——まっしぐらに飛び込んで行くのである。この点に関して、生方智子は正當にも「清の愛として意味付けられているものは、主体の欠如が充足する地点である。それは失われたものとしての母子未分化状態の実現ということもできる。超越者としての清は母のメタファーとなるのだ」⁽¹³⁾と述べている。

それでは「坊っちゃん」のそうした退行がいったいどのように生じていったのであろうか。それを次に見てみよう。まず第1章において「母が死んでから」という表現が以下のようにほぼ続けざまに四度も繰り返されることに注目したい。

母が死んでからは、おやじと兄と三人で暮っていた。(9頁)

母が死んでから清はいよいよおれを可愛がった。(10頁)

母が死んでから五、六年の間はこの状態で暮っていた。(略)母が死んでから六年目の正月におやじも卒中で亡くなった。(13頁)

「母も死ぬ三日前に愛想をつかした」(10頁)とあるように、母からすっかり見放された「坊っちゃん」は実際には、自分で思っている以上に、母から疎んじられたことへの悲しみ、寂しさがあったということなのであろう。そしてそうした「坊っちゃん」の心の動きに呼応するかのように、「清」は「坊っちゃん」のことを非常に可愛がるようになるのである。そこには、「全く愛に溺れていたに違いない」(12頁)とあるように、「愛」という言葉さえ見られるのである。

全く愛に溺れていたに違いない。元は身分のあるものでも教育のない婆さんだから仕方がない。単にこればかりではない。贖罪目は恐ろしいものだ。清はおれを以て将来立身出世して立派なものになると思い込んでいた。そのくせ勉強する兄は色ばかり白くって、とても役には立たないと一人できめてしまった。こんな婆さんに逢っては叶わない。自分の好きなものは必ずえらい人物になって、嫌なひとはきつと落ち振れるものと信じている。(12頁)

この引用に典型なように、「清」の中にあるのは好きとか嫌いという感情のみであって、どうしてこれが好きであれが嫌いなのかを他人に説明するだけの論理もなければ言葉もないという状態である。いやそれどころか、ここはそうした論理や言葉をまったく必要とさえしていないと言うべきかもしれない。こうした没論理状態の中で、「今から考えると馬鹿々々しい」(12頁)と「坊っちゃん」本人も後には感じるようになるのであるが、「坊っちゃん」は育って行くのである。「清」とのこうした密着した状態、これは先にも生方智子を引用しながら触れたように、母と子がきわめて密着した幼児的な世界である。だからこそ「清」はいつまでも彼のことを「坊っちゃん」と呼んでいるのである。それは「清」と彼との関係がまさに幼児期の母子関係から一步も出ていないからである。

だがここで重要なことは、この関係があくまで非対称的であるということである。このことに注意したいと思う。それは「清」にとって、彼はいつまでも「坊っちゃん」であるが、「坊っちゃん」からすれば、「清」は母親的な存在であると同時に単なる婆さんに過ぎないのである。先の言葉で言えば、「清」が幼児期の母子関係の中に完全に埋没しているのに対して、「坊っちゃん」はその関係に完全に埋没しているわけではないということである。だからこそ「坊っちゃん」は「清」を以下のようにいささか批判的に眺めることができるのである。

この婆さんがどういう因縁か、おれを非常に可愛がってくれた。不思議なものである。(略)かえってこの清のようにちやほやしてくれるのを不審に考えた。(略)しかしおれには清の意味が分からなかった。好い気性なら清以外のものも、もう少し善くしてくれるだろうと思った。(略)自分の力でおれを製造して誇ってるように見える。少々気味がわるかった。(略)時々是小供になぜあんなに可愛がるのかと不審に思った。つまらない、廃せばいいのにと思った。気の毒だと思った。(略)全く愛に溺れていたに違ない。元は身分のあるものでも教育のない婆さんだから仕方がない。単にこればかりではない。鼠目は恐ろしいものだ。(略)こんな婆さんに逢っては叶わない。自分の好きなものは必ずえらい人物になって、嫌なひとはきっと落ち振れるものと信じている。(10—12頁)

文庫本でわずか3頁の間に「不思議なものである」、「不審に思った」、「気

味がわかった」,「気の毒だと思った」という表現の連発である。これはあきらかに「坊っちゃん」が「清」の自分への愛を十分に感じながらも、同時にそうした「清」の姿を批判的に眺めていることの証拠でもある。つまり「坊っちゃん」は「清」を絶対的な母親存在とするのではなく、あくまでも相対的な存在として見ているということである。これはある意味で精神的にきわめて健全な姿と言えるだろうし、実際これから社会の中に出て行く若者にとっては当然な態度であろう。人間は母親との密着状態のまま成長するわけにはいかないからである。ところがそうした「坊っちゃん」の当然あるべき姿が「四国辺のある中学校」に赴き、そこで「異国体験」をすることで急速に消滅してしまうのである。

第3章 —精神的に退行する「坊っちゃん」—

「坊っちゃん」は「四国辺のある」城下町へやって来たその最初の晩に「清」の夢を見、そしてその翌日「清」に以下のような手紙を書く。

「きのう着いた。つまらん所だ。十五畳の座敷に寝ている。宿屋へ茶代を五円やった。かみさんが頭を板の間へすりつけた。夕べは寝られなかった。清が笹船を笹ごと食う夢を見た。来年の夏は帰る。今日学校へ行ってみんなにあだなをつけてやった。校長は狸、教頭は赤シャツ、英語の教師はうらなり、数学は山嵐、画学はのだいこ。今に色々な事をかいてやる。さようなら」(25頁)

この手紙は、小森陽一が「ここには何事かを脈絡だてて他者に伝えようとする意識は見られない。自己の行為だけが(略)あらゆる因果関係や説明ぬきに羅列されているだけである。手紙を受け取った者に、何をどう理解してもらうのかという配慮は一切ない。いわば書き手自身しかわからないような、最小限に単純化された言語による行為の記述である」(傍点小森)⁽¹⁴⁾と指摘するように、たしかに誰か他人にあてて書かれたものというよりはむしろ、自分のための覚書と言うべきものかもしれない。そもそも「坊っちゃん」がこのようなものを書くというのも、彼の中に、何を書いても「清」には分かってもらえるという、いわば子が母に対する「甘え」にも似た安心感、信頼感があるからであろう。しかしそれでもここにはまだ、言語を介し

て自分以外の誰かに何事かを伝えようとする他者志向の意識があると言いたい。というのも、最終的にはこの意識さえも「坊っちゃん」の中からすっかり失われてしまうからである。この点については後に触れることにして、今はもう少しこの辺の経緯を追ってみよう。

手紙を書いた翌日から「坊っちゃん」は、「いよいよ学校へ出た。初めて教場へ這入って高い所へ乗った時は、何だか変だった。講釈しながら、おれでも先生が勤まるのかと思った」(26頁)と戸惑いながらも教え始めるわけである。だがその二時間目から、先に見たように、「坊っちゃん」は学生との間にいわば敵対関係のような雰囲気を感じ取り、そうした状態のまま、天麩羅事件や団子事件さらには宿直中のバツ事件や呐喊事件に遭遇することになるのである。その結果「坊っちゃん」は次のように考える。

考えて見ると厄介な所へ来たもんだ。一体中学の先生なんて、どこへ行っても、こんなものを相手にするなら気の毒なものだ。(略)それを思うと清なんてのは見上げたものだ。教育もない身分もない婆さんだが、人間としては頗る尊とい。今まではあんなに世話になっても別段ありがたいと思わなかったが、こうして、一人で遠国へ来て見ると、始めてあの親切がわかる。(略)清はおれの事を欲がなくて、真直な気性だといって、ほめるが、ほめられるおれよりも、ほめる本人の方が立派な人間だ。何だか清に逢いたくなかった。(41頁)

この引用中に「今まではあんなに世話になっても別段ありがたいと思わなかったが、こうして、一人で遠国へ来て見ると、始めてあの親切がわかる」とあるように、この頃から次第に「坊っちゃん」は「清」のことをそれまでとは異なる目で眺めるようになるのである。その際のポイントは「一人で遠国へ来て見ると」という一節である。おそらく「坊っちゃん」は、「清」という母親的な存在から離れ、遠い見知らぬ土地でひとり生活することによって、一種のカルチャーショックとでも言うべきものを痛切に味わっていたのであろう。いわゆる異文化接触によるカルチャーショックというものである。¹⁵⁾ その結果「坊っちゃん」は精神的にきわめて不安な状態になり、「何だか生徒全体がおれ一人を探偵している」(34頁)のではないかという妄想を抱いたりするようになるし、後には「神経衰弱」(115頁)という言葉さえ使われるようになるのである。さらには土地の方言に対する苛立ちもますます募ってくる。「校長なんかになるといやに曲りくねった言葉を使うもんだ」

(36頁)に続いて、「この学校じゃ校長ばかりじゃない、生徒まで曲りくねった言葉を使うんだろう」(39頁)とあるように、彼らを使う「曲りくねった」言葉(気性)が、「清」がほめる「真直ぐな気性」と対比的に並べられ、ますます「清」への想いが募ることになるわけである。さらに学校の同僚たちとの関係が「坊っちゃん」の心をよりいっそう苦しめる。

赤シャツはホホホと笑った。別段おれは笑われるような事をいった覚はない。(略)赤シャツがホホホと笑ったのは、おれの単純なのを笑ったのだ。単純や真率が笑われる世の中じゃ仕様がな。清はこんな時には決して笑った事はない。大に感心して聞いたもんだ。清の方が赤シャツよりよっぽど上等だ。(56頁)

以前には「(「清」は)教育のない婆さんだ」(12頁)といささか批判的に見ていた「坊っちゃん」が、この頃には、教育のない「清」のほうが、「大学の卒業生だからえらい人なんだろう」(22頁)と(以前には)確信していた「文学士」の赤シャツより人間的にはよっぽど上等ではないかと考え始めるようになるのである。その結果「坊っちゃん」は「清」は自分の「片破れ」(59頁)であると断言するに至る。「清」が自分の「片破れ」であるとは、言うまでもなく、「清」と「坊っちゃん」とは一心同体だということである。とうとう「坊っちゃん」はそれまであった批判的なまなざしを捨ててしまい、ここに「清」を絶対化し、そうすることで「坊っちゃん」は「清」と完全に(母子未分化状態的に)密着してしまったのである。この後はこれをより強く実感するだけである。以下に必要な箇所をいくつか引用しよう。

一所にいるうちは、そうでもなかったが、こうして田舎へ来て見ると清はやっぱり善人だ。あんな気立のいい女は日本中さがして歩行いたって滅多にはない。(75頁)

清ならこんな時に、おれの好きな鮪のさし身か、蒲鉾のつけ焼を食わせるんだが(略)。どう考えても清と一所でなくっちゃあ駄目だ。(82頁)

どうしても早く東京へ帰って清と一所になるに限る。こんな田舎にいるのは墮落しに来ているようなものだ。(116頁)

こうして遠くへ来てまで、清の身の上を案じていてやりさえすれば、おれの真心は清に通じるに違ない。通じさえすれば手紙なんぞやる必要はない。(118頁)

最後に引用した一節では、先にも触れたように、「坊っちゃん」は手紙を書くことさえ否定して、「おれの真心は清に通じるに違ない。通じさえすれば手紙なんぞやる必要はない」（118頁）とまで言い切ってしまうのである。

第4章 —「清」と一体化した東京—

上の引用箇所にある82頁の引用から116頁の引用に移行する間に、物語の上では、「うらなり」の九州延岡への左遷という重大な事件が明らかとなるが、「坊っちゃん」はこの事件を経験することによって赴任先の城下町を離れることを完全に決意するようになる。そのとき「坊っちゃん」の中では、それまで必ずしも一致してはなかった東京と「清」とが緊密に結びつき始め、あたかも東京という現実空間が「清」の愛に包まれた、浄らかな（「清」らかな）空間そのものであるかのように変貌し始めるのである。同じことが「四国辺のある」城下町に対しても言える。ただしこちらは東京とは逆の方向に変貌し始めるのである。すなわちこの町は人間を墮落させるものしか存在していない、醜悪で不純な「不浄な地」というように。これが明確に表われているのが以下に引用する、「うらなり」の送別会の席上での山嵐の演説ではないだろうか。

延岡は僻遠の地で、当地に比べたら物質上の不便はあるだろう。が、聞く所によれば風俗の頗る淳朴な所で、職員生徒悉く上代樸直の気風を帯びているそうである。心にもない御世辞を振り蒔いたり、美しい顔をして君子を陥れたりするハイカラ野郎は一人もないと信ずるからして、君の如き温良篤厚の士は必ずその地方一般の歓迎を受けられるに相違ない。（107頁）

ここでは「坊っちゃん」のいる町が、「淳朴」で「樸直」な九州の延岡との対比の中で、よりいっそう卑劣で陰険で狡猾な場所へと変貌している。この山嵐の演説はあきらかに「淳朴」な田舎（「延岡」）に対して卑劣な都会（「四国辺のある」城下町）という対立構図の中で語っている。これはある意味では紋切り型そのものの演説なのであるが、しかしここで注目したいのはそのことではない。実は山嵐の演説が含意していることこそ注目したいのである。つまり東京という「都会」と「四国辺のある」城下町という「田舎」

という二項対立的構図の中では、一般的に言えば、東京が卑劣で陰険で狡猾な場所となるはずなのに、『坊っちゃん』という物語ではそれが逆転してしまっているということである。山嵐の演説の中で「四国辺のある」城下町があたかも世界中の醜悪さを集約したような場所として語られるにつれて、「坊っちゃん」の中で、東京が次第に——「清」と一体化することによって——演説の中の「延岡」と同様の、「淳朴」で「樸直」な浄らかな（「清」らかな）場所へと変貌して行く⁽¹⁶⁾のである。かくして「坊っちゃん」は山嵐に向かって次のように言い切ることが可能となる。

「そんなら、おれは明日辞表を出してすぐ東京へ帰っちまわあ。こんな下等な所に頼んだっているのはいやだ」(130頁)

単なる「野蛮な所」に過ぎなかった土地がいつしか卑劣で陰険な場所となり、ついには「こんな下等な所」へと変貌して行く。そしてその結果、最終的にはこの地は「不浄な地」となるわけである。つまりこの地がこのように変貌するには、そこに、もう一方の極としての東京が逆向きの方向に変貌する必要があるのである。いやむしろ東京のそうした変貌こそがこの地を「野蛮な所」から「不浄な地」へと変貌させたと正しくは言うべきかもしれない。そして東京のそうした変貌には、上に見たように、「坊っちゃん」の「清」との一体化という、「坊っちゃん」自身の心の動きが大きく関与しているのである。

「坊っちゃん」のそうした心の動き、それを私は先に精神的退行と呼んだが、こうした退行状態のとき、「坊っちゃん」にとって、いわゆる他者が存在していない⁽¹⁷⁾のは言うまでもない。他者が存在していない以上、「坊っちゃん」には「世界」という概念もあり得ないし、「理解する」あるいは「交流する」といった形で他者との関係を打ち立てる意志も欲望もない。別な言い方をすれば、それは「言葉を必要とせぬ世界」にいると言うべきであろう。ここで思い出すのが、第7章の半ばにある、「清」から手紙を貰った「坊っちゃん」がそれを繰り返し繰り返し読む場面である。少し長いがそのまま引用したいと思う。

なるほど読みにくい。字がまづいばかりではない。大抵平仮名だから、どこで

切れて、どこで始まるのだから句読をつけるのによっぽど骨が折れる。おれは焦っ勝ちな性分だから、こんな長くて、分りにくい手紙は五円やるから読んでくれと頼まれても断わるのだが、この時ばかりは真面目になって、始から終まで読み通した。読み通した事は事実だが、読む方に骨が折れて、意味が繋がらないから、また頭から読み直して見た。部屋のなかは少し暗くなって、前の時より見にくく、なったから、とうとう橡鼻へ出て腰をかけながら鄭寧に拝見した。すると初秋の風が芭蕉の葉を動かして、素肌に吹きつけた帰りに、読みかけた手紙を庭の方へなびかしたから、しまいぎわには四尺あまりの半切れがさらりさらりと鳴って、手を放すと、向うの生垣まで飛んで行そうだ。(81頁)

「坊っちゃん」が「清」からの手紙を何度も何度も繰り返して読むのは、たしかに、引用箇所にも明示されているように、手紙の字面は理解できてもその意味するところまでなかなかたどり着けないからであろう。しかしそれだけではない。ここでの「坊っちゃん」は、あきらかに、手紙を読むというよりはむしろ、手紙を通して「清」その人と直接的に触れ合っていると言うべきなのではないか。あるいは「清」の愛に包まれてゆっくりまどろんでいると言うべきかもしれない。だからこそ「坊っちゃん」は「清」の手紙を「鄭寧に拝見し」ているのだろう。たしかにこの城下町にもいろいろな陰謀や策謀がうごめいているし、至るところに対立があり争いがある。「坊っちゃん」自身もそうした対立の渦の中に巻き込まれてしまっている。そんなときにそうした対立や争いとはまったく無縁な地点で、「坊っちゃん」と「清」とが手紙を通してまさに無媒介的に触れ合っているという、この場面は、渡部直己に倣って、⁽¹⁸⁾ 物語の中でもっとも美しい場面と言ってもよいのではないだろうか。「坊っちゃん」にとってこれはまさに至福の瞬間なのである。

第5章 — ナショナリズムの成立 —

しかしこの至福の瞬間が「坊っちゃん」の中で東京を「美しく浄らかな」土地へと変貌させ、いま彼の住んでいる「四国辺のある」城下町をその反対に位置する「醜悪で狡猾な」土地へと変貌させるならば、私たちはそうした「至福の瞬間」を否定しなければならない。実際には東京もこの城下町もそこには対立があり争いがあり陰謀があるはずである。それが一方をユートピア的な浄らかな土地とし、もう一方をその正反対的な土地とすることは、

「坊っちゃん」の中に現実から逃避する気持ちがあると言うべきであろう。それを私は先に精神的退行と呼び、さらには母親の胸に抱かれてまどろんでいる状態とも呼んだのである。「坊っちゃん」の場合、さらにもうひとつの要因が加わる。それは「四国辺のある」城下町を「不浄な地」と呼んで、それを忌避し、排除していることである。東京が「浄らかな」場所になるにつれて、よりいっそうこの城下町がその反対の「不浄な」場所へと変貌して行くのだが、こうした排他的な精神の働きはある意味でナショナリズム⁽¹⁹⁾に特有なものと言えるであろう。実際「坊っちゃん」と「清」とが作っている二人の愛の世界は、それが東京という具体的な地名と結びつくことでナショナリズム特有の排他的な色合いを強く帯び始める。自国と異国という形で世界を二分し、自国は美しい浄らかな場所であるのに対し、自分の外部にある異国は醜悪なもの、不浄なものとして、それを徹底的に排除し遠ざけようとする。異国には、したがって、「化物が寄り合ってる」(87頁)のだから、異国を征伐することはまさに正義そのものであるという論理がここに成立することになる。実際「坊っちゃん」と山嵐はそのような意識で赤シャツたちに暴力を振るったと思われる。

「貴様らは奸物だから、こうやって天誅を加えるんだ。これに懲りて以来つしむがいい。いくら言葉巧みに弁解が立っても正義は許さんぞ」と山嵐がいったら兩人ともだまっていた。(141頁)

しかしここにはどこかに論理の短絡が見られないであろうか。いやそれどころか、ここには論理の不在があるばかりで、あるのはひとりよがりの感情だけとは言えないであろうか。もちろん私たち読者はこの物語を、語り手である「坊っちゃん」の視点⁽²⁰⁾からしか眺めることができない以上、たとえば赤シャツはどこから見ても陰険で狡猾な卑劣漢としか見えないように思われる。だからこそ以下の引用のように、「坊っちゃん」たちと一緒にあって、嘘をついている赤シャツを非難し、こんな嘘つきの卑劣漢には暴力を加えても当然だと考えがちである。

「胡魔化す必要はない。僕は吉川君と二人で泊ったのである。芸者が宵に這入ろうが、這入るまいが、僕の知った事ではない」(と赤シャツは言う——大貫

注)

「だまれ」と山嵐は拳骨を食わした。赤シャツはよろよろしたが「これは乱暴だ、狼藉である。理非を弁じないで腕力に訴えるのは無法だ」
「無法で沢山だ」とまたばかりと撲ぐる。(140—141頁)

しかしそれは本当に当然なことなのであろうか。私たちも赤シャツと共に「理非を弁じないで腕力に訴えるのは無法だ」と「坊っちゃん」に本来は抗議すべきなのではないであろうか。しかしこのときの「坊っちゃん」にはもはやこのような抗議も通じないはずである。というのも、「坊っちゃん」はこのとき、好き嫌いという、きわめて感情的なレベルでしか行動できない存在となってしまっているからである。したがってそのような抗議に対して、「坊っちゃん」はおそらく次のように反論するであろう。

議論のいい人が善人とはきまらない。遣り込められる方が悪人とは限らない。
(略) 中学の教頭位な論法でおれの心がどう動くものか。人間は好き嫌で働らくものだ。論法で働らくものじゃない。(100頁)

これこそまさに「清」の「自分の好きなものは必ずえらい人物になって、嫌なひとはきつと落ち振れるものと信じている」(12頁) 態度と同じものであろう。「坊っちゃん」は、城下町での「異国体験」を経ることによって、実は、「清」とそっくり同じような幼児的存在となって帰ってきたと言わざるを得ないのである。こうした態度が、先に述べたナショナリズムと一体化したものであることは言うまでもない。自国は好きであるがゆえに浄らかで美しいが、その一方、異国は嫌いであるがゆえに不浄であり醜いという態度である。そこには自己をたえず批判的に眺めては、自己を相対化しようとする姿勢がない。あるのは「最負目は恐ろしい」(12頁) としか言いようがない、きわめて偏狭的な自己賛美の態度だけである。

ここで福沢諭吉による「桃太郎批判」の一節を以下に引用したい。それは諭吉が自分の子供たちのために記した道徳の本である『ひゞのをしへ』の中にある。

もゝたるふが、おにがしまにゆきしは、たからをとりゆくといへり。けしからぬことならずや。たからは、おにのだいじにして、しまいおきしものにて、

たからのぬしはおになり。ぬしあるたからを、わけもなく、とりにゆくとは、もゝたるふは、ぬすびとゝもいふべき、わるものなり。⁽²¹⁾

この中で諭吉は日本人の誰もが英雄と認めている「桃太郎」を激しく批判している。それは、「桃太郎」が正当な理由もないのに「鬼が島」を征伐し、鬼たちの持ち物を勝手に奪ってしまった泥棒だからだと言うのである。もちろん「桃太郎」が単に他人の所有物を横領したからいけないと諭吉は言っているのではない。諭吉は、「桃太郎」が根拠もないのに相手を「鬼」と決めつけ、その一方で自分の方は正義の側にいるのだと考えて何ら疑問を持たない、いわば自己中心的で独善的な考えそのものがおかしいと言っているのである。まさにこれは私たちの「坊っちゃん」批判とほぼ同じ趣旨ではないだろうか。

『桃太郎』での「鬼」とは言うまでもなく「不浄なる存在」であり、「鬼が島」とはあきらかに「不浄なる地」であろう。つまり『坊っちゃん』の最終場面において「坊っちゃん」と山嵐が「この不浄な地を離れた。船が岸を去れば去るほどいい心持ちがした。神戸から東京までは直行で新橋へ着いた時は、漸く娑婆へ出たような気がした」(142頁)とあるのはまさに『桃太郎』において桃太郎が鬼退治を果たした後、意気揚々と自分の親たちのもとに戻る場面そのものではないだろうか。その意味では『坊っちゃん』という物語はまさに『桃太郎』話の変形譚と言えるのではないか。

おわりに —『桃太郎』の変形譚としての『坊っちゃん』—

これでようやく、『坊っちゃん』という小説がなぜかくも私たちに人気があるのかがよく分かった。それはまさに『坊っちゃん』＝『桃太郎』だからである。ところでこの『桃太郎』の話は、滑川道夫の浩瀚な著作『桃太郎像の変容』⁽²²⁾によれば、時代によりさまざまにその意味を変えてきたとのことであるが、しかしいずれにせよ、この物語が変わることなく主張していることは、浄らかな「日本男児」の代表である「桃太郎」が正義の名のもとに穢れた「不浄な地」である「鬼が島＝異国」を征伐するというものであろう。したがってこれが時には幕末時期の攘夷論者と結びつき、あるいは先の太平洋戦争時期には鬼薙米英を唱える狂信的な国粹主義者と結びつくことになる

のであるが、しかしそこまで狂信的にならなくとも、『桃太郎』の話はどこかでナショナリズムと結びついたまま、いつまでも私たちの自己中心的な世界観を具現する話⁽²³⁾として存続しているように思われる。同じことが『坊っちゃん』においても言えるであろう。「坊っちゃん」が赤シャツたちに天誅を下すのを多くの人が当然だとしているのは、何よりもまず、彼らが住む「四国辺のある」城下町が穢れた「不浄な地」であるからである。そしてその彼らとはまさに「鬼が島」に住む「鬼」そのものだからである。したがってここでの「天誅」とは、『桃太郎』で言えば、鬼退治ということになるはずである。

しかしはたして赤シャツたちは本当に「鬼」といえるのであろうか。むしろ彼らをその逆の、ごく普通の人間だと考えてみるべきではないであろうか。そうすると『坊っちゃん』という物語の別な面が見えてくるはずである。「坊っちゃん」はまず自分の兄を「元来女のような性分で、ずるいから」(9頁)と言って徹底的に嫌うが、しかしその兄の行動力となるととうてい「坊っちゃん」の比ではない。彼は学業を終了すると、両親がすでに死去しているということもあって、自分の相続した家屋敷を売却し、そのまま単身九州に赴く。「坊っちゃん」がいつまでも自分の故郷というべき場所に執着しているのに対し、彼の兄は長男であるにもかかわらず、そのようなことにほとんど固執することなく他の土地に赴くことになるのである。また、「坊っちゃん」からはやはり「どこまで女らしいんだか」(61頁)分からないと言われて嫌われている赤シャツも、実は、他の土地からやってきた「渡りもの」(91頁)に過ぎない。しかし赤シャツは、「坊っちゃん」の兄と同様、自分の故郷を捨てて新しい土地に根付いて生きようとしている。実際、彼はその土地の娘と結婚しようとさえしているのである。したがって土地の人々からは、以下の引用にあるように、かなりの評価を得ている。

「そりゃ強い事は堀田さん(山嵐一大貫注)の方が強そうじゃけれど、しかし赤シャツさんは学士さんじゃけれ、働らきはある方ぞな、もし。それから優しい事も赤シャツさんの方が優しいが、生徒の評判は堀田さんの方がええというぞなもし。」(80頁)

こうした赤シャツがどうして「鬼」でなければいけないのであろうか。赤

シャツが「陰険で狡猾な卑劣漢」であると見なされているのは、あくまでも「坊っちゃん」側の一方的な見方に過ぎないと言わざるを得ない。たとえば梅原猛は小説『坊っちゃん』について次のように言う。

この小説は、坊っちゃんという主人公の比類のない明るさと正直さで笑わせながら、損をしてもあえて守らねばならぬ大切なものが人生にはあることを教える。(略) 自然主義文学が日本文学を中心になって以来、ほとんど無視されてきた道徳的価値がこの小説には燦然と輝いている。⁽²⁴⁾

これは、真の正義は「坊っちゃん」側にあるにもかかわらず、「坊っちゃん」は立身出世主義者の赤シャツたちの陰謀によって敗北してしまう、しかしそれでも彼の敗北覚悟の戦いにはある重要な意味があるのだというような解釈であろう。しかしこうした解釈こそが今いちばん問われるべきなのではなかろうか。正義は「坊っちゃん」の側のみにあるのではなく、実は赤シャツの側にも本来的にはあるはずであって、そうだとすれば二者の間でどちらが正しいのかを言語（理性）を介して討議すべきなのである。⁽²⁵⁾ しかしそうした手続きを経ることなく、暴力に頼るという体質。これこそ私たちにとっては実はいちばん排除しなければいけないものなのではないか。この点に関して生方智子は以下のように述べている。

「四国辺」という空間を否定の対象として見出し、それを暴力的に抑圧することによって自己同一性を獲得する「坊っちゃん」は、植民地を支配することによって帝国主義国家としてのアイデンティティを獲得する「国民国家」日本のアレゴリーにもなるのだ。⁽²⁶⁾

「坊っちゃん」の異国体験とはしたがって単なる異国体験というのではない。それは、生方の引用にあるように、本質的には帝国主義国家の植民地体験に近いものと言うことができるかもしれない。実際『桃太郎』の話が私たち日本人を心地よく魅惑し続けてきたのと同様、この小説もたえず私たちを自国礼賛的なイデオロギーによって深く魅了し続けてきたのである。だからこそ「近代日本小説の中でも『坊っちゃん』はもっともよく読まれている作品」⁽²⁷⁾となるのである。しかし今の私たちに必要なのは『坊っちゃん』礼賛をすることではないだろう。そうではなく、この小説には上のような排他的

イデオロギーが根強く絡まっているのだということを十分に自覚した上で、それをたえず批判的に乗り越えることではないだろうか。もはや「坊っちゃん」の姿に共感している場合ではないのである。

注

- (1) 『坊っちゃん』からの引用は特に断わらない限りすべて岩波文庫(1989年改版)からである。この箇所は岩波文庫18頁からの引用である。以下はその頁数のみ本文中に示す。
- (2) この点に関して小森陽一は「矛盾としての『坊っちゃん』」(『漱石研究』第12号、翰林書房、1999年、64—65頁)において次のように述べている。

裸体に近い姿で社会生活をおくることに対して、「野蛮」のレッテルをはる感受性は、明らかに、欧米列強の生活慣習を前提にした形で、アジアやアフリカに対する植民地的侵略を展開した欧米の侵略者たちが、「文明」の名において、支配を正当化するとき発動されたものである。世界を「文明」と「野蛮」(略)に二分し、産業革命後の欧米諸国のライフ・スタイルを「文明」とし、他の地域に押しつけていった論理を、「おれ」(「坊っちゃん」——大貫注)は、この時点で内面化している。

- (3) 『文化人類事典』(弘文堂、1987年、366頁)
- (4) ジョウゼフ・コンラッドの『闇の奥』(*Heart of Darkness*) (1899年)を参照するまでもなく、文明と野蛮との差異は本質的にはきわめて曖昧なものであり、「文明人」であるはずの西欧白人の中に、たとえばアフリカの黒人と同様の「野蛮性」を見出して驚愕するというテーマは、19世紀末以来の西欧文学の大きなテーマのひとつである。
- (5) 大嶋仁は『福沢諭吉のすゝめ』(新潮社、新潮選書、1998年、108頁)において以下のように記している。なお本稿はその着想の多くを大嶋仁のこの著書ならびに大嶋仁「「異人」の論理と「他者」の論理」(平川祐弘ほか編著『内なる壁——外国人の日本人像、日本人の外国人像』TBSブリタニカ、1990年、555—571頁)に負っている。

日本には古来「浄・不浄」という価値基準がある。多くの国にもそういうものがあると思われるが、普通はそれは「善・悪」という道徳基準によって置き換えられ、あるいはその道徳に隠れて見えなくなっている。ところが日本では、「善・悪」の道徳の向こうに、かなりはっきりと「原始的」な「浄・不浄」が透けて見えるのである。「善・悪」よりも「浄・不浄」の方が優勢である。それが基本的な日本の道徳であると言えば言い過ぎになるうか。

- (6) 有光隆司はその『坊っちゃん』論の中で、「男の四国での教師生活はまず、「野蛮な所についた」ことに始まり、「不浄な地を離れる」ことで終結する(『坊

つちやん』の構造——悲劇の方法について——」（日本文学研究資料叢書『夏目漱石Ⅲ』、有精堂、1985年、42頁）と指摘している。この指摘は私たちと問題意識を共有しているかのように見えるが、実は違う。有光は先の一節に続いて「前者は男が初めて四国の地に足を踏み入れたとき（略）船頭を見て、即座に抱いた直観のようなものであり、後者はその「野蛮」さをしたたか体験した直後の実感である」と述べることで、「野蛮な所」と「不浄な地」との間の大きな差異について考えようとはしない。しかし私たちは両者の間には大きな違いがあり、その違いを実感することこそが「坊っちゃん」としての異国体験そのものなのだと主張したいのである。

- (7) 平岡敏夫は、その著作『『坊っちゃん』の世界』（塙書房、塙新書、1992年、104—105頁）において、『坊っちゃん』という作品は、実は漱石のロンドン体験を描いたものではなかったかと主張し、次のように述べている。

重要なことは、ロンドン体験としての「坊っちゃん」を言うときの基本的な構図がここにあるということである。（略）東京に残してきたただひとりの愛する女性存在を思う、異郷の孤立した男の物語が「坊っちゃん」であり、また漱石のロンドン体験であった。

ここでの平岡の主張それ自体はさほど意味があるとは思えないが、しかし『坊っちゃん』の中に漱石のロンドン体験の痕跡を見出そうとする平岡の着眼には敬意を表したい。というのも私たちは、漱石の「異国」嫌いの性癖がこのような小説を書かせたのではないかとひそかに考えているからである。詳しくは次の注8を参照されたい。

- (8) ここで思い浮かぶのは漱石の晩年の作品である『道草』の冒頭の一節である。

健三が遠い所から帰って来て駒込の奥に世帯を持ったのは東京を出てから何年目になるだろう。彼は故郷の上を踏む珍らしさのうちに一種の淋しさを感じた。彼の身体には新らしく後に見捨てた遠い国の臭がまだ付着していた。彼はそれを忌んだ。一日も早くその臭を振り落さなければならぬと思った。（岩波文庫[1990年改版]、7頁）（下線は引用者）

引用箇所の下線部分に注意したい。主人公健三が「遠い国」から帰国したばかりという設定である。もちろんこの「遠い国」が現実のロンドンを指すかどうかは今ではさほど問題ではないだろう。問題は下線部分にある「遠い国の臭」という表現であり、さらにはその「臭」が忌避の対象となっているということである。つまり「遠い国」とは穢れた「不浄な地」であり、その「不浄な地」の穢れを身体に付着させて帰国した健三は一刻も早くその穢れを洗い浄めなければいけないと考えているというわけなのである。まさに『坊っちゃん』と同じ構造ではないか。ということは、漱石には「異国」をこのような形で忌み嫌うという心持があったということなのだろうか。彼がロンドン留学中に神経

衰弱になるほど、西洋文明と対決し、その巨大さに苦しんだという体験がそのような心持ちを生じさせたということなのだろうか。ただ本稿ではこれ以上漱石自身の問題に踏み込むだけの準備も余裕もないので、以上のことを示唆するだけにしたい。

- (9) 平岡敏夫「解説」（『坊っちゃん』岩波文庫、1989年、172頁）。平岡敏夫はこの文庫解説において「清」に関してさらに以下のように記している。

父母の<家>もなく、<家庭ならざる家庭>も崩壊した宙吊りの深い孤独のなかで、語り手が最後に語りたかったのは、自分を心から愛してくれた唯一の存在が現実にはこの世になく、別の世界に永遠に待っているという意識である。（略）それは、死によって永遠に隔たれつつも、ひたすら待ちつづける誠実な女性存在というしかないものである。（172—173頁）

しかし私たちは逆に平岡敏夫に尋ねたい。「坊っちゃん」は「清」を「自分を心から愛してくれた唯一の存在」とみなすことによって逆にそれ以外の他人と関わる可能性を完全に捨て去ってしまったのではないかと。本稿では、平岡がしたような「清」解釈は、実は、「坊っちゃん」が持っている自己中心的な世界観から生み出されたものに過ぎず、ある意味ではナショナリズム特有の排他的なイデオロギーに過ぎないのだと主張するつもりである。

- (10) こうした点に関して石原千秋は「坊っちゃん」の「山の手」（片岡豊ほか編『漱石作品論集成[第二巻] 坊っちゃん・草枕』、桜楓社、1990年、126—130頁）において次のように記している。

「坊っちゃん」は清に始まって、清に終わっていると言える。「坊っちゃん」の<枠>は清の物語なのである。（略）読者は二章以下の物語を読むのに、あたかも無償の愛のように見える清の<坊っちゃん>に対する態度を無意識裡に模倣し、そのような清の目を通して<坊っちゃん>を見る事になる。

- (11) 社会学者桜井哲夫はアイデンティティ・クライシスについて以下のように解説している。なお、以下の引用は今村仁司編『現代思想を読む事典』（講談社、講談社現代新書、1988年）の「アイデンティティ」の項目（32—33頁）からである。

アイデンティティとは、単に自分が自分であることを知っていることなのではない。それは、過去の自分、現在の自分（自分が考えている自分）、他人が認めている自分、といったそれぞれのレベルでの自分のイメージが連続性を持っていると信ずることであり、そのようなものとしての自分が確かな将来に向かって進みつつあるのだという確信を持つことなのである。（略）そしてこのような内的アイデンティティの確立に障害が生まれることをアイデンティティ・クライシス（同一性の危機）とよぶ。

- (12) 石原は前掲論文において以下のように記している。

彼（「坊っちゃん」——大貫注）は、「～が嫌い」という否定的で受け身の感情でしか自己同定ができなくなっていたのだが、その彼がぎりぎりの所まで追いつめられた時、はじめて肯定的な言葉に自己のアイデンティティを見出したのである。（133頁）

もしくは亀井秀雄の「『坊っちゃん』——「おれ」の位置・「おれ」への欲望」（『国文学（特集＝漱石論の地平を拓くもの）』5月号、學燈社、1992年、47—55頁）と題する論文を参照されたい。

- (13) 生方智子「国民文学としての『坊っちゃん』」（『漱石研究』第9号、翰林書房、1997年、91—92頁）。なお本稿は石原前掲論文と共にこの生方論文から大きな示唆を得ている。
- (14) 小森陽一「裏表のある言葉——『坊っちゃん』における〈語り〉の構造——」（日本文学研究資料叢書『夏目漱石Ⅲ』、有精堂、1985年、53頁）
- (15) この辺の詳しい経過に関しては小森注14論文を参照されたい。その中で小森は「「おれ」（「坊っちゃん」——大貫注）の無意識な清への回帰願望から、意識的なそれへの転換の過程は、同時に「おれ」が「裏表のある奴」らの論理に侵蝕され、無意識のうちに彼らの世界にとりこまれ変節させられていく過程でもあった」（56頁）と述べている。本稿では、そうした経過を論旨の都合上、きわめて簡略化して「いわゆる異文化接触によるカルチャーショックというものである」としたのであって、基本的には小森の言うとおりである。ただ本稿では、その経過それ自体に関心があるのではなく、「坊っちゃん」が異国体験を経ることによって「清」と一体化し、その結果、アイデンティティの危機を乗り越えることができたのではないかと主張することの方に大きな関心がある以上、上記のように簡略化することも許されるものと考えている。
- (16) その典型的な例は以下のような箇所である。これは先にも本文中に引用したが、論旨の必要上ここに再度引用する。

どうしても早く東京へ帰って清と一所になるに限る。こんな田舎にいるのは墮落しに来ているようなものだ。新聞配達をしたって、ここまで墮落するよりはました。（116頁）

「坊っちゃん」はあきらかに東京がそうした墮落から逃れられる唯一の空間であるかのように考えている。

- (17) 「他者」に関しては次の論文が大変に参考となった。高原和政・五味淵典嗣・大高知児「街鉄の技手はなぜこの手記を書いたか」（『漱石研究』第12号、翰林書房、1999年、72—90頁）。高原たちはたとえば以下のように記している。

（「坊っちゃん」——大貫注）は、「生徒」たちの〈他者〉性に気付くことができず、

<他者>としての清とも、出会うことができなかった。(87頁)

私たちが基本的には高原たちに同意するのだが、ただ本稿においては、「坊っちゃん」は、最初の頃は「清」の<他者>性におぼろげながらも気付いていたにもかかわらず、異国体験を経ることによって、そうした<他者>性から急激に眼をそらし始め、結局は東京にいる「清」との母子愛関係の中に自閉してしまつたと主張したいのである。高原たちの論文に欠けているものは、「坊っちゃん」における異国体験の重要性への認識である。

- (18) 渡部直己「解説——不滅の国民作家」(『坊っちゃん』集英社文庫, 1991年, 203—204頁)
- (19) ここで使っているような意味でのナショナリズムに関しては、やはり、ベネディクト・アンダーソン(白石隆, さや訳)『想像の共同体』(リプロボート, 1987年)の次の一節を引用せざるを得ないだろう。

ナショナリズムは国民の自意識の覚醒ではない。ナショナリズムは、もともと存在していないところに国民を発明することだ。(略)国民は一つの共同体として想像される。(17—19頁)

つまり敵対する他民族を外部として差異化(排除化)することによって「我々＝内部」としての自民族を存立させるメカニズムがそこに働いているというわけである。

- (20) 視点については先に引用した小森注14論文はじめ多くの人が言及しているが、ここでは以下の一節を引用しておく。

語り手の「おれ」と語られる「坊っちゃん」との間は乖離しているにもかかわらず、語り手は「坊っちゃん」の物語を「おれ」による一人称形式で語ることによって、語り手自身が「坊っちゃん」であることを装っているのである。(生方前掲論文, 83頁)

- (21) 福沢諭吉『ひまのをしへ』(『福沢諭吉全集』岩波書店, 1963年, 第20巻, 70頁)
- (22) 滑川道夫『桃太郎像の変容』(東京書籍, 1981年)
- (23) 小森陽一は「桃太郎」(石原千秋ほか『読むための理論——文学・思想・批評』世織書房, 1991年, 82頁)において以下のように記している。

『桃太郎』の物語は、第二次世界対戦中は軍国主義の宣伝材料となった。桃太郎および犬・猿・キジは果敢な日本軍の喩となり、鬼ヶ島の鬼は「鬼畜米英」の喩となった。逆に敗戦後の桃太郎は、民衆や労働者の旗手となり、鬼は軍国主義者や支配者の謂となった。しかし問題にすべきなのは、世界を正・邪に分け、正は邪を暴力でほろぼしてよしとする、より基底的な物語のイデオロギーなのだ。

- (24) 梅原猛『『坊っちゃん』は大衆小説か』（大岡信ほか『近代日本文学のすすめ』岩波書店、岩波文庫別冊13、1999年、122頁）
- (25) 比較文学者の佐伯順子がその『坊っちゃん』論である「聖母を囲む男性同盟——『坊っちゃん』における男性的要素」（『漱石研究』第12号、翰林書房、1999年、154頁）において、『坊っちゃん』のドラマは、主人公の〈男性性〉対赤シャツの〈女性性〉という二項対立を軸に成立しており（略）「論法」を無視した行動規範を是とする主人公にとって、「理非を弁じないで腕力に訴えるのは無法だ」という赤シャツの反論自体が唾棄すべき〈女性性〉の発露に他ならず、まさに理屈抜きで主人公の「嫌」の対象となる」と述べているように、この物語には「理性と暴力との対立」というよりはむしろ、明治の書生社会特有の「男性性と女性性との対立」の方がより前面的に描かれていると言うべきかもしれない。だが本稿ではそうした点を十分に踏まえながらもあえて「理性と暴力との対立」に焦点を絞って論じてみた。
- (26) 生方前掲論文、92頁。
- (27) 梅原前掲論文、115頁。